昭和36年1月16日第3種郵便物認可　昭和55年4月1日　第257号　(毎月1回1日発行1部30円)

全仏

NO 257

4/55

花まつり

春先き特有の冷いかぜの中に、庭さきの沈丁花の香りが匂い、思わず深くすいこんだ。

沈丁花の根っこにある小さな池の鯉も冬眠からさめ、ゆったりと泳ぎはじめている。鯉もおそらく春の息吹きを体いっぱいに味わっているのにちがいない。

今年もまた暖い春を迎えられ、ありがたい。

生命ある有難さをつくづくと思う。

一木一草、生きとし生けるもの全ての生命にかぎりない生命の尊さを感じる四月、花まつりの月である。

釈尊への報恩の日、心と体を合せ、花まつりをさらに大きく盛りあげるとともに、生命の有難さを共に考え合う日としたい。

行　シリーズ①

回峰行（天台宗）

（解説8面に）

全日本仏教会

カンボジア難民

笑顔を取戻す子供たち

全日仏青　ボランティアを派遣

笑顔で指導を受ける子供たち

屋外でもみんな元気に……

笑顔を取戻してきたカンボジア難民……飢餓と疾病によって極限の状況におかれていたカンボジアの人々も、キャンプでの医療活動、栄養、教育などの救援活動により、少しづつではあるが笑顔を取戻し元気に生活している。全日本仏教青年会をはじめ、各宗派、県仏、団体などが積極的に救援活動を実施しており、全仏内に各団体の協力を得て、難民問題の情報資料の収集、連絡のため「難民救援連絡協議会」を発足させた。

今回は全日仏青が二回の調査にもとづき、二月二十四日に第一次救援隊を派遣して、WFB、WFBYが中心となりTYBA（タイ仏青）が展開する「ダルマカートラ」プロジェクトチームに合流し教育、宗教などの面から救援活動を行ってきた。以下は全仏雇員の浅川和也（仏英研）の報告である。

——◇——

全日本仏教青年会（永倉嘉文理事長）では、カンボジア難民救援運動を展開しユニセフならびに、世界仏教徒青年連盟（WFBY）、タイ仏青で行っている、「ダンマ・ヤートラ・プロジェクト」に献金をしている。一方、二月二十四日から三月四日にわたり、各宗派から集まった九名と仏英研からの通訳一名による第一次救援隊が、難民キャンプにおいて、ボランティア活動を行った。タイ国よりWFBY会長のブロック氏（元商務副大臣、次期駐米大使）はじめ五名が参加し初の日・タイ仏教徒合同の救援活動となった。

私たちは、主にサケオ・キャンプで活動した。昨年十月、十一月頃はたいへん困窮した状況であった、人々は死んでゆく者を目の前にしても涙さえ流さなかった、それ程疲れきっていたと言われる。現在は国連ならびに諸機関の努力もあってほぼ充分な水、食糧、医療がほどこされ、餓えと死におびえている状態からは脱した。WFBYは、このような時期に仏陀の教えにもとづいて、教育・宗教面から援助活動を展開している。

まず、教育担当官のアルン氏と会う。学校は、六歳から八歳の子供を対象に始まったばかりであり、しきりに教師・テキストの不足を訴える。先生方を集めていただいて、いっしょに大きな栗の木の下で、むすんでひらいて・ジェンカなわとび等をやった。語の意味を説明し、後にクメール語に置きかえてもらうように伝えた。先生と呼ばれても中学生くらいの女子も多い。行動力があり、子供たちと駆けまわってくれる人がいないのであろう。

最初、何の技術も持たない私たちに何ができるのかという不安があった。しかし実際に先生・子供たちと歌い、笑い遊戯を、英・仏・クメール・タイ・日本語がとびかうちに行い、時のたつのを忘れるのであった。

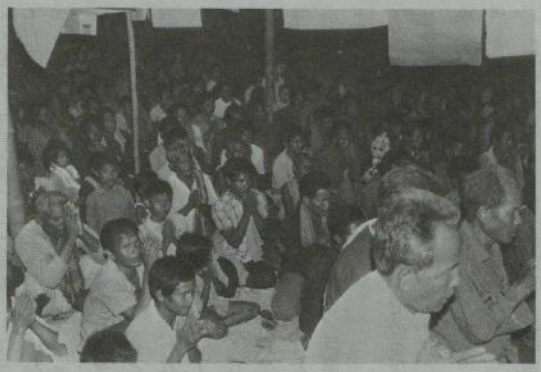
WFBYのはからいで、夜、キャンプ内の仮設寺院での集会に参加した。私たちは、特別に招かれ説教を求められた。一万人以上の大集会であった。摩尼師の話に笑い、涙する人々の顔には、仏陀の教えによって一すじの光明をうかがうことができた。人々は会った時、別れる時、お礼を言う時、必ず合掌する。それ程仏教が、彼らの心に強く根づいているので

ある。合掌をして待つ彼らに対し、ただ、一時的な同情からではなく、平和建設に向けて仏教徒は真摯に考える時期に来ていると思わる。

WFBYのこの「ダンマ・ヤートラ」は現地にも良く融け込み非常に実りある活動となっている。WFBY本部との連携の下に、日本、タイの仏青ばかりでなく、世界の仏教徒が一つとなった運動になってゆくことが期待される。

カンボジア難民救済運動の今後について

全仏国際文化局長　安本　利正



全日仏青の救援隊の説教集会で合掌する人々

食糧は足りている、物資も出まわっている――と新聞に報道されると、もう大丈夫だという気分になる。果して、そうであろうか。食糧は足りても、飢餓状態を脱して、どうにか体力が回復してきたのであり、健康な身体にはほど遠いものである。その生活状況は未だ人間以下のものであり、ただ毎日を生きているのみで、何時になったら故国へ帰れるか全く分らない。将来に対する希望も計画も全く予想がつかぬまま、毎日を食べて寝て過している難居生活である。

何年にもわたって戦火に追われ、放浪して飢餓と恐怖の毎日を過して来た難民の心は、正常な精神状態ではないであろう。食糧が足りて、体力が回復しても、精神的飢餓は回復できるものではない。先ず精神の安定と正常な思考の回復が必要であろう。特に、児童にあっては人間としての成長期に飢餓に遭遇し、4～5年間も学習を全く受けていなければ、先ず初歩的な頭脳の育成と基礎的な学習が必要である。従って、今後の救援活動は初期の内容とは異り、緻密な計画のもとに行動しなければ、その効果を発揮することは出来ない。

しかし、彼の地域全体の現況をみると、また何時非常時態に突入するか全く不確実である。更に難民が増加し飢餓に追われるか分らない情勢を考えると、再び食糧その他の迅速な援助も考慮しておく必要もある。

我々日本人には、現実に戦闘状態の実感が分らないため、緊迫感が甚だ乏しい。また、難民と言う言葉もなじめない言語である。国境線を知らぬ島国の日本人は、自分が他国へ逃げることは夢にも考えていないことである。従って、ややもすると他国の事として遠い他人事と考えがちである。しかし、本気で考えると短気、熱し易い日本人は、生死の切ぱつまった問題として刹那的に悲壮感を持ち過ぎ、飢餓に対する同情は感傷的になりやすい特性をもっている。ところが、その状況が一端治まると、急性な感情は、急に熱が冷めて忘れがちである。

仏教界の救済運動は幾つかの団体では早くから運動を開始したが、全体から見ると本年になって活発になって来た様子である。各団体にて規模の大小は様々であるが活動を展開している。幾つかの団体において、それぞれに特色があり、現地各国の仏教界と連繋をもって動いている。宗派として、寺院として旧来からの仏教交流を基礎として交流を再開した宗派もあり、積極的に活動を進めている。これらの運動が長期間にわたって続けられるならば、仏教界の新らしい実践行として大きな成果を得られるであろうと期待されるものである。

西欧における奉仕活動が、キリスト教の博愛の精神を基礎にして、組織化され、いつでも、どこへでも出動する体勢が常に準備されている。従って、何処へでも即座に対応できるのである。処が、我が国には、そのような組織が整っていないため、迅速な行動ができないのであった。

仏教の対応は遅かったが、強固なる慈悲の精神を生かして長期的運動を展開するならば、慈悲の思想と奉仕の実践による仏教の現代に生きる道が展開され、今後の指針となるであろう。

難民救済に活発な活動

加盟団体

（浄土真宗本願寺派）インドシナ難民の救援基金をすでに活発に始めており、宗務所同朋運動本部を中心に拍車をかけ一億円を目標にしている。義損金は寄付や托鉢などによってあつめられることになっており、本願寺新報などで広報する。

（日蓮宗）カンボジア難民救援募金として広く檀信徒に呼びかけを行ない、各寺より宗務所を経由して本部に集められる。すでに日蓮宗新聞などで大きく広報

している。

（真言宗豊山派）難民救援活動は委員会を構成して行なう。一次勧募として三千万円、最終目標として一億円を見込んでいる。

（曹洞宗）東南アジア難民救済会議を発足させ、調査団もすでに二次、三次と派遣するなど積極的な活動、視察を行ない、すでにボランティア活動も実施している。救援基金も既に一千万を越え、この運用についても細部にわたって計画を進め、広報活動も「救援ニュース」などを発刊し各方面に呼びかけている。目標は三億円。

（浄土宗）救済対策は検討中であるがとりあえず全寺院に呼びかけて救済金を募る。すでに浄土宗青年会では托鉢などで募金活動を盛んに行なっている。

（青森県仏）全日仏青の呼びかけに県内地区仏教会にてそれぞれ募金し、全日仏青に直送する。

（臨済宗妙心寺派）アジア難民救援献金として寺院、関係機関に呼びかけ、一億円を目標に集める。花園会本部が担当として行ない、広報活動も積極的に展開される。

その他にも臨済各派や四国各県仏、その他の団体などでも募金活動が行なわれている。

WFBY難民救援金報告

WFBYより難民救援状況が次のよう報告されてきた。

（十二月）全日仏青千ドル、スイス財団五百ドル、スイスRC六十ドル、ダライ・ラマ師五千ルピー。

（一月）プロフィルド氏二百ポンド、スバステ女史五千バーツ、西独RC五千六百バーツ、香港仏青三百五十ドル、クルシ氏三千七百バーツ、全日仏青九千ドル。

（二月）セランゴールRC一万二千バーツ、シンガポールRC四千シンガポールドル、全日仏青一万ドル。総計四万ドル強。

WFBY会長より書簡

世界仏教青年連盟（WFBY）会長のブロック・アムラナンド氏より、カンボジア難民についての書簡が届いたので紹介します。

「昨年十一月二十九日付にて、WFB各センターへカンボジア難民救援方の緊急要請を送付、またタイ国境に居る多数の難民緊急援助のため、タイ仏青が行う〝ダンマヤトラ〟救援計画に金銭的援助を懇請しました。これに対して世界各地より多くの援助がありました。心から感謝しております。

その中でも全日仏青は過去三回に亘っての援助は、私の感激する事実であります。

難民は落ちつきを取戻しておりますが教育と仏教信仰が必要であり、この面について〝ダンマヤトラ計画〟で一層努力をいたす所存です」

新任ごあいさつ

全日本仏教会理事長
鱒渕正浩

此度はからずも全仏理事長の重職にご推薦を頂き、是に恐縮至極に存じ、この重責に対しまして一抹の不安の念にかられております。

勿論不徳非才、極めて微力で甚だ怪たるものを覚える次第です。しかしながらこの重職をお預りいたしましたからには、駑馬にむち打ち努力精進いたす所存でございます。

さて、私も全仏事務総局に勤務すること四期八ケ年、その間仏教界各方面の多勢の方々にご交誼ご指導を賜ってまいりましたが、特に一昨年の第十二回世界仏教徒会議日本大会には事務総長として微力を尽すことができ得ましたことは誠に光栄に存じております。

全仏といたしましては、当面諸問題が山積みいたしております。全仏機構の見直し、インドシナ難民救済、同和推進、仏教センター設立、ルンビニー開発協力などがあります。

これらの諸問題に対して宗派を超え団結して全一性と計画性を持った時代即応の活発なる全一仏教運動の展開と促進に邁進して行かなければなりません。

私は会員諸師と共に、仏陀の教法により人間が真に生きる喜びと楽しさを享受できる明るい社会づくりと、会の活発化を計ってまいりたいと念願いたしております。

何卒加盟宗派、県仏、団体の皆様方の格別のご協力ご鞭撻をお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

全日本仏教会事務総長

日野照護

世界仏教徒会議日本大会を成就せられた鱒渕先生以下の方々の後を承けまして、その職に就くに当り、先ず国家的とも申すべき大事業を完遂されたご努力に、衷心より敬意を払う次第でございます。小生もとより浅学非才、そのような大業は愚か、次に控えております種々の問題に関しましても、諸先生方の力強いご支援が無ければ、到底対処すべくもございません。適切なご指導とご鞭撻をくれぐれもお願い申し上げます。

幸いにも、小生は昭和四十年より四年間、全仏事務総局に在籍致しておりましたため、旧知の方々が多くおられ心丈夫に感じたことでございますが、それらの方々の暖かいご後援の上に諸先生方のご援助が加われば、誠に心強い限りでございます。以上、格別のご配慮をお願いして簡単ではございますが就任のご挨拶といたします。

全仏
第3種郵便物認可
昭和55年4月1日

世界の仏教 ⑥

タイ国の仏教

黒田武志

昨年末、曹洞宗ではカンボジア難民救済のための調査団をタイ国に派遣した。調査団はまず、同じ仏教徒としてタイの仏教教団がこの問題にどう取組んでいるか、できることなら共同歩調をと思い、大本山総持寺からの留学僧を受入れているワット・パクナムを、表敬を兼ねて訪れた。その結果は、個人的にはともかく教団としては何等考えていない、というよりは、戒律上、また僧伽の機構形態からして対社会活動は禁止されているとのことだった――と報告している。

それは当然のことで、日本の仏教は、「自未得度先度他」を標榜し、「人間の如来は人間に同ぜるが如し」と、僧侶の生活も在家人との距離を縮める方向に向っているが、上座部と称するタイの仏教では、比丘と俗人の差をできるだけ大きくする方向に進んでいる。

二、三の例を挙げると、「円頂方服」、頭をまるめて割裁の法衣を着き、頭髪と共に眉毛も剃り落す。一日二食（正午過ぎたら食事をしない）で飲酒しない。女性とは衣服が風で触れ合うことも許されないし、供養を受ける際は直接手渡しされてはならず黄色いハンカチ（パープラケーン）を用いなければならない。金銭に触れてはならぬし、時計を持ってはいけない。自転車に乗ってはならぬし、急いで歩くこともいけない等々、比丘の一挙手一投足はきびしく規制され、それだけ俗人との差は大きい。

托鉢にしても、日本の場合は布施にあずかれば「財法二施　功徳無量　檀波羅密　具足円満　乃至法界　平等利益」と唱えながら合掌するが、タイでは俗人は比丘に対して合掌の礼をとるが、比丘は仏陀と先輩比丘に対する以外は合掌はしない。だから供養を受けても平然としている。相手が国王であってそうである。万事がこんな調子で、堅く戒律が守られているから対社会的活動など思いも寄らないことである。

古来私ども日本人は、南方仏教を小乗（ヒーナヤーナ）と呼んで来たが、これは大乗（マハーヤーナ）側からの蔑称と受取れる。そこで第一回世界仏教徒会議（昭和二十五年・スリランカ・コロンボ）においてもこの呼称を斥け、上座部仏教と呼ぶことにしている。上座部仏教は長老派（テーラワーダ）ともいわれ、その名の通り持戒堅固が大きな特色である。

さてその戒律であるが、得度を了えた二十歳以上の比丘は二百二十七条の戒を保っている。二十歳以下の見習僧「沙弥」（サーマネーフ）は十戒を守っている。また在家信者である優婆塞・優婆夷は五戒を保っており、月に四回の布薩日（ワンプラ）にはワット（寺）に詣でて八戒を受ける。それからワットの中には白衣剃髪の女性を多く見かけるが、これは比丘尼ではない。戒を守ることを至上とするタイ国では、三百余戒を保つことのできる比丘尼はもはやこの地上に存在しないというのである。従って、白衣剃髪の女子修道者（メーテー）は沙弥と同じく十戒を保っているに過ぎない。

比丘もまた、二百二十七の戒を保っているからこそ比丘であって、その中の重い戒を破った者（波羅夷罪を犯した者）はもはや比丘ではない。従って日本風の「破戒僧」などはタイには存在しない。

波羅夷罪とは、無殺生・不偸盗・不淫・不妄語の四戒を犯した場合である。

不殺生戒は、故意に人命を奪った場合波羅夷罪となる。もちろん妊娠中絶も含まれる（赤児は生れた時点で六ケ月として計算される。だから十九歳半になるば比丘得度が許される）。動物を殺しても波羅夷罪にはならないが、不注意にしろ殺生は堅く禁じられている。禁じられているなどという他律的なものではなく、タイの人々は不注意にしろ蟻一匹踏みつけるをも非常に恐れる。だから比丘は八資具（必需品）の一つ漉水嚢を使って水を汲むのである。第二不偸盗戒、タイでは現在一バーツ（邦貨十二円）以上の物を盗むと波羅夷罪となる。第三不淫戒、当然のことながら比丘は結婚しないどころか、一とたび出家せばたとえ母親にも触れてはならない。

在家信者の守る五戒は、第三不淫戒を不邪淫に改め、五番目に酒類の使用を禁じている。比丘はこうした細々とした二百二十七条の戒を守らなくてはならぬので、その生活はかなり束縛されたものであり、とても対社会的活動などできるものではない。

全仏
第3種郵便物認可

機構改革特別委員会

——委員長などきまる

第二回機構改革特別委員会は、二月十二日京都智積院会館で午後一時より行なわれた。出席は、伊藤（浄）藤音（西）小林（天台）豊田（日蓮）阿部（曹洞）小沢（智山）土屋（妙心）広島（東）の各委員が熱心に午後四時まで討議を続けられた。全仏事務局の新局長紹介の後、委員長に浄土真宗本願寺派の藤音晃祐委員を委員長、副委員長に真言宗智山派の小沢照禧委員と日蓮宗豊田英世委員を選び、委員長欠席の場合どちらかの副委員長によりこの委員会を開催する事で全員の了解を得た。ついで中村財務部長により前回委員会の経過を読み上げ委員全員の了解を得た。

前回委員会で問題になった懸案事項の審議に入り、理事定数の件では、全仏寄付行為、第六章第三十条に顧問および参与の項があるので、登記しない理事は参与等に名称を変え、理事は二十名以上三十名以内の方向で、もう一度弁護士等の専門家を交えて具体的案を次回に提出し審議いただく事で、了解を得た。次に、全仏会長・副会長・理事長の職務権限の件に入った。寄付行為第四章にある会長が委嘱するとある部分を削ってしまい、事務処理を簡素化する。また第十六条の「会長および副会長は理事会および評議員会の議決を経た者を推戴する。」とあるのを「理事会で議決し、評議員会で推戴する」という事にしたらどうかという意見が強く出た。なおこの件については、次回にさらに討議する事で意見が一致した。

全仏会長、副会長の選出宗派の拡大の件では、負担金が今迄の例でいうとからんでくるので、事務局案の会長は負担金上位五宗派より、また副会長は県仏・諸団体からも幅広く選出する方向で、具体的に次回につめる事で了解された。

なお第三回機構改革特別委員会は、四月十七日（木）午後一時より花園妙心寺にて行う事になった。

同和問題特別委員会

——各宗の現状報告など

第三回同和特別委員会は、三月七日午後一時より、京都・大谷派宗務所会議室で開かれ、①同和問題各宗派の現状報告②回答書提出後における同和委員会の方針などについて討議された。

①については、遅れてきた分を全日本仏教会経由附せんをつけて至急に送附することになった。

②については

一、全仏として同和問題をどのようにとらえていくか。

二、実際は各宗派で取り組んでゆくが各宗派ができない部分、宗派を超えてやらなくてはならない部分。

などをふまえ、当面宗教者として歴史的事実を掘り起してみて、他の運動体にはない今日に至った差別の事実を明確に勉強するということになった。

手始めに、五月に研修学習会を事務局の計画で開催することで閉会した。

なお、同和特別委員会は、現在まで総務局の所轄であったが、四月より組織局の所轄に移行する事になった。

四国ブロック会議

……奥道後でひらく……

全仏の四国ブロック会議は愛媛県仏の担当により、二月二十三日午後一時より奥道後温泉のエヒメ荘に四国各県仏代表が出席して開催された。

議題は①全日本仏教徒会議の件、②時局対策の件、③次回ブロック会議の件、④各県仏の活動の件、⑤その他、について話し合われたが、①については、大会のあり方（開催地、内容など）や、県仏組織の強化、全仏加盟のメリットなどの質疑がなされた。②では同和問題とカンボジヤ難民救援について話し合われた。特に同和は地域の問題も含め、またカンボジアについては募金協力などについて討議された。③は各県一巡したので第一回目の香川県仏にお願いすることとなった。④では各県仏の報告があった。

【出席者】松下、佐々木（香川）中妻（徳島）横山、東野、小島（高知）五葉、越智、千、高縄、小野田（愛媛）

【出席者】朝日泰峰、松本健雄（曹洞宗）、岸融証、三帰義光（大谷派）、竹田英宣、飯田信弘（浄土宗）、近藤玄鶴（妙心寺派）、小沢照禧（智山派）、小川又信（豊山派）

全仏事務総局人事

庶務部主事　服部光順　1・31　退任
国際部主事　石川恒彦　〃　〃
庶務部主事　杜多茂夫　2・19　異動
組織部書記　柴　雅雄　〃　新任

全仏事務総局のベテランである服部、石川両主事が退職となりました。本当に長い間ご苦労さまでした。新任の柴書記をよろしくお願い申し上げます。

寺院用具
浅草通り五鳳会加盟店
株式会社 浜田商店
東京都台東区寿2－10－9（地下鉄田原町駅前）
電話 代表（841）4965

全仏
第3種郵便物認可

包括宗教法人等 管理者研究協議会

多くの参加者、質疑も熱心に

昭和五十四年度包括宗教法人等管理者研究協議会（東京会場）は、三月六日午前十時より、東京虎ノ門の国立教育会館大会議室において、文化庁文化部宗務課と日本宗教連盟（全仏など五団体）の共催により開催され熱心な討議がされた。

会議は馬場道男全仏庶務部長の総合司会ですすめられ、まず大丸直文化庁長官と庭野日敬日宗連理事長が挨拶、司会より日程説明、文化庁より趣旨説明のあったあと研究協議に入った。

Ⅰでは、被包括法人に対する包括法人の指導について、代表役員の法的理念や指導方法の具体例などが話し合われた。

Ⅱでは宗教法人の社会的役割について現代社会における宗教的活動の意義などが討議され、また山内舜雄師（山洞宗教化研修所）が「教団における組織機構」と題して発題し討議された。

このあと自由討議が行なわれ、種々質疑応答がなされるなど、雨天にもかかわらず各教団、あるいは未加盟教団など多数の出席者で盛会であった。なお、全仏加盟の宗派より出席が少なかったが、ほとんどが宗会中であり期日決定が問題点であった。

〈全仏関係出席者〉長谷川霊信（念法真教）香川雅之（和宗）四宮正音（孝道教団）大沢自聚（醍醐派）高橋誠実（浄土宗）川口善教（本門流）白鳥幸雄（本願寺派）山下通雄（本門法華宗）

タイ大会などを討議

――国際専門委員会――

国際専門委員会（柳了堅委員長）は、二月二十一日午後二時より、全仏会議室において開催され、柳委員長挨拶のあと議題にそって討議された。

㈠第十三回WFBタイ大会について

日本代表団については、代表二名、オブザーバー三名の構成に全仏会長、理事長に参加要請をする。メインテーマはホスト国のタイに一任する。議案に関しては加盟団体や各委員に諮る。一般参加者を募り、開会式出席後に①ルンビニ視察団、②ビルマ仏蹟巡拝団のコースを計画している。

㈡WFB本部報告

主に前回大会（第十二回日本大会）の決議履行状況に関する報告がなされた。

㈢カンボジア難民連絡協議会

各団体がどのような活動を行っているかなどの連絡、調整を計る。

㈣ルンビニ開発について

ネパール側の計画の実態、WFB本部の意向を正しく把握する。また、政財界などを含む国家的な計画をたて、全仏がその窓口として努力する。委員会を早急に発足すべきであるなどの意見がだされた。（出席者―柳了堅、西村輝成、山口貫美子、織内七郎、近藤隆敬、松涛弘道、佐藤良純）

第13回 WFBタイ大会

11月21日～29日 バンコクとチェンマイ

第十三回世界仏教徒会議（WFB）タイ大会は、十一月二十一日～二十九日にバンコクおよびチェンマイの両市で開催されることが決定した。

大会は二十二日の開会式にはじまり二十四日からは古都チェンマイへ移り二十八日までWFBYの大会と平行して行なわれ、各センターの代表五名は全日程に参加する。日本代表は目下選衡中で、近々発表される。

第十三回WFB大会日程

11月21日　代表団バンコク着、WFB及びWFBY執行委員会

22日　代表団登録、WFB総会、WFB開会式

23日　講演会、僧院訪問、WFBY開会式・第一回総会

24日　チェンマイへ移動

25日　WFBY常設委員会、施食供養、WFB第一回総会

26日　常設委員会、WFBY第二回総会

27日　常設委員会、WFBY第三回総会・閉会式

28日　WFB第二回総会・閉会式

29日　バンコクへ移動

――◇――

全仏ではこの大会を記念して二つの代表団を募集する。①ルンビニ視察団②ビルマ仏蹟巡拝団。双方とも大会の開会式に参加する。

――ビルマ、ルンビニへ二団を派遣――

全仏
第3種郵便物認可
昭和55年4月1日

新年度事業など討議

―文化専門委員会―

文化専門委員会（真渓義貫委員長）は三月十二日午前十一時より、全仏会議室で開かれ、安本局長、真渓委員長挨拶のあと昭和五十五年度文化部事業計画について話し合われた。

(1)機関誌「全仏」については、全仏としての主張や、時局に対する問題提起をすべきであり、仏教啓蒙の記事がなくてはいけない。もっと全仏的なテーマを選ぶ必要がある。(2)日本仏教文化会議については、この会議がもっと宗派などに生かされるよう努力すべきである。(3)仏教徒のつどいについては、内容はよかったが動員がまったくダメであり、一考すべきである。など意見が多くだされた。

なお安本局長、磯山部長より任期満了のお礼がのべられた。

出席者―真渓義貫、島田喜久子、井上日宏、宝田正道、摩尼清之、伊藤完夫、河原晨晴

◇掲◇示◇板◇

山形県仏人事

▼役員改選が行なわれ、事務局であった板垣隆寛師が会長に就任。事務所は以前通り得性寺内。

岐阜県仏人事

▼五十五年度新役員は、大石好文会長が再任。事務局長には新らしく松波高義師が就任。

新義真言宗東京出張所

▼新義真言宗宗務所東京出張所は、文京区湯島四ノ六ノ十二・湯島ハイタウンB棟十二F一二一一号に住所変更となりました。

事務総局録事（九月）

六日　包括宗教法人研究会
七日　同和特別委員会
　　日宗連理事会
十一日　局内会議
十二日　文化専門委員会
二十六日　組織専門委員会
三十一日　局内会議

表紙の写真

古くから比叡山では厳しい修行を〝地獄〟と呼ぶ。「回峯行」も無動寺谷の回峯地獄といわれ、その厳しさは凄絶なものであるという。

峯から峯と毎日三十～四十キロ歩き続けて、歩きはじめれば休むことも延期することもできない。

無動寺回峯、飯室回峯の二つが伝えられているが、どちらも初百日から七百日へと。そして八百日、九百日と行程は厳しく延びてゆき、満行の〝一千日〟をめざす。

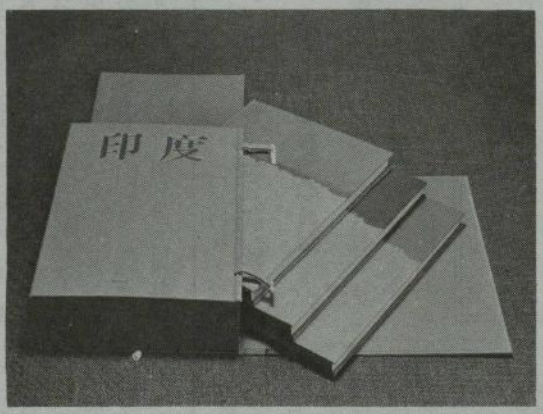
千余年の伝統が受け継がれ、凄絶な行者の話しは無数にあるという。

（写真提供―比叡山時報社）

昭和五十五年　四月一日発行
四月号　第二五七号
発行人　日野照護
編集人　安本利正
発行所　財団法人　全日本仏教会
東京都港区芝公園四―七―十三
電話〇三（四三七）九二七五

豪華写真集

印度



全日本仏教会のご推薦をいただきました「印度」は、取材に3年、制作に1年の歳月をかけ、仏教を生んだインドの原点を追求、仏陀に編集の焦点を合わせた我国最初の写真集です。五〇〇余点にのぼる写真と各界一流の執筆陣による権威あるテキストは、仏教に深い関心のある方々にはビジュアルな参考書としてご期待に添えるものと思います。

第一巻―仏陀の道　仏陀の生きた、歩いた、考えた道を自然、風景をベースにしながら展開。

第二巻―刻まれた祈り　インド仏教美術の全貌と、その美術がヒンドゥー美術に流れるまでを描く。

第三巻―豊饒の世界　仏陀を生んだインドの土壌は何か。インドの母なる大地をインドの人々の生きざまを自然、風景をおりまぜながら追求。

〈概要〉A4判、天竺木綿クロス帙上製本、帖入り　各巻二一四～二一六頁、定価五七、〇〇〇円（分割払制あり）

〈発行〉東京都千代田区一ッ橋1―1―1　毎日新聞社内　毎日コミュニケーションズ

パンフレット贈呈